20.10.1

静岡新聞

（第三種郵便物認可）

日本経済の盛衰に焦点

エコノミストたちの栄光と挫折

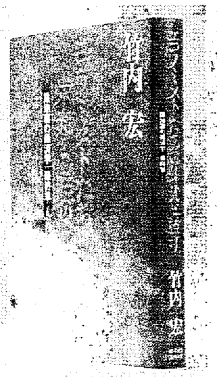
竹内　宏著

エコノミスト竹内宏氏（本社客員論説委員）、入魂の著作である。

氏が命運を共にされた日本長期信用銀行（調査部・総研）約五十年の歴史は、戦後の経済復興、高度成長期から石油危機を経て、バブル崩壊、金融破たんに至る日本経済の盛衰とぴたり重なる。

この間、エコノミストたちはどのような役割を果たしてきたのか。歴史の「生き証人」として、長銀調査部の誕生、調査テーマや活動の軌跡をたどりつつ、多面的に検証している。時代の変遷に沿って、自身の履歴や、折々に活躍した多彩なキーマン、大物政治家が次々登場する仕立てだから、面白いことこの上ない。

いわゆる「マル経」「近経」の経済学者や、官庁、民間のエコノミストたちは、経済復興時をはじめ転機に直面するつど、激しく論争するなど切磋琢磨しながら、適切な政策対応をとることに協力し、日本の経済発展に大きく貢献した。そうした経緯に焦点を当てた考察を、混迷の今日こそ改めて参考とすべきであろう。



長銀調査部は、竹内氏を筆頭に著名なエコノミストを輩出した。実証的な研究が特長で、（一）計量経済学、産業組織論の日本経済への応用、（二）原子力や情報産業など新大型産業の探索、（三）アジアやアラブに着目した途上国調査、人脈づくり等々、その先進性、開拓精神が強く印象に残る。

ただし、国策銀行ゆえに大蔵省の意向に逆らえず、言説に制約を受けた。また、シンクタンク（総研）が発足してからも親銀行の経営事情に左右され、銀行の経営危機を予測したレポートも無視される。やがて長銀・総研も幕引きを迎えるが、そこに追い込まれた無念さが行間から伝わる。

こうした調査と経営との関係、独立性の確保などの課題についても、本書は示唆に富んでいる。

最後に、世界経済の大変革期を迎え、組織的に研究できるシンクタンクのエコノミストたちに活躍を期待し、想いを託したエールを送っている。

ぜひ広くご一読をお薦めしたい。

〈佐藤　克昭＝前静岡経済研究所副理事長〉

（東洋経済新報社・二一〇〇円）